人が「われ、かつてアルカディアにありき」と感じて長時間くつろげるような「懐かしアイテムを配したブック・カフェ」が創られているという話なので興味が湧いたのだ。なるほど、新刊書店に古本が同時に並べられているばかりか、ブック・カフェには六、七〇年代の雑誌のバックナンバーが揃い、レンタルDVDコーナーは新宿昭和館を連想させるようなプログラム・ピクチャーが充実している。おまけに六〇歳以上は四月末までなんとタダでDVD四枚レンタルできる！　これなら人気がないはずはない。

書店の方はというと、ジャンル分けされた部屋の四方の壁が全部書棚で覆われているという書斎方式で、宮殿の部屋のように連鎖している。歴史・伝記の部屋に入ると、平置き台にフロレンティーノ・ロダオ『**フランコと大日本帝国**』（深澤安博ほか訳　晶文社　5500円＋税）がある。日本にフランコ・スペインのような「枢軸国なのに中立」という選択肢はなかったのか考えるに至ったので即購入し、ブック・カフェで読み始める。

一九三九年四月、内戦に勝利したフランコ・スペインは日独伊防共協定に参加し、ソ連包囲網の一角を成すが、独ソ不可侵条約の締結と第二次大戦の開始により、野心の矛先をスペイン植民地の奪還へと向けるようになる。しかし、フランスの半分を占領したヒットラーは「枢軸国の国境が、性急なスペイン人より猜疑心の強いペタン政権下のフランス人によって守られる方がよいと判断するにいたった」。そこから生まれたのがスペインの日本への接近というオプション。「客観的な困難さにもかかわらず、帝国的野望はマドリード政府に活力を与え、スペインを日本に接近させる主要な動機となった」。すなわち、反共・反英米で思惑が一致した両国はプロパガンダで互いに相手を誉め上げる方向に舵取を行ったのだが、スペインは日本に対して紋切型のイメージしか持っていなかったため、日本の敗色が濃くなるや、掌返し的対応（フランコは対日宣戦布告まで考えた！）を取ることになる。「スペインでは、うまく強国の地位に登りつめた賞賛されるべき国としての日本の理想的なイメージが支配的だった。しかし、最後の時期には、日本は、大いなる禍や不吉なニュースをもたらす野蛮で凶暴な国と見られることになった。（中略）つまり、専門家がいなかったため、友好的な時期にも敵対的な時期にも、常套的な見方やステレオタイプ化されたイメージに基づいて、政策決定が極めて安易になされたのである」

以上が研究者としての主張であるが、しかし、われわれにとっての興味はむしろ、著者が膨大な資料を駆使して解き明かしていく日西間の隠された関係のほうにある。すなわち、日米開戦後、中立国スペインを通じて日本が行った諜報活動の内実である。須磨在スペイン公使の依頼を受けた親日派外務大臣セラーノ・スニェルはTō機関という諜報組織を作り、元闘牛士アルカサルを使ってアメリカにスパイ網を張り巡らして日本に情報を流したと伝えられるが、実際にはアルカサルが得た情報の多くは暗号解読済みのアメリカ防諜機関に筒抜けであり、またアルカサルは情報の入手困難ゆえに、日本がそうあってほしいと思うようなガセネタ情報を捏造していた節がある。

もう一つは日本が占領したフィリピンにおいて、スペイン系コミュニティが当初の反米・親日から反日へとシフトしてゆく過程が詳細に語られていること。原因は日本の軍部が「スペイン人だろうと白人には変わりない」という固定観念に囚われて、対応の差異化を怠ったことにあるようだ。私がル・カレのようなスパイ小説家だったら資料に使わない手はないと思わせる画期的な研究書である。

『フランコと大日本帝国』

×月×日

TSUTAYA代官山店の歴史・伝記の部屋で目をとめたもう一冊はジャン・フェクサス『**図説　尻叩きの文化史**』（大塚宏子訳　原書房　3200円＋税）。

『SとM』という本を書いたとき、日本のSMは縄だが西欧のそれは鞭で、日欧文化の本質的相違に通じているとしたが、にわかには信じて貰えなかったようだ。しかし、本書を読むと鞭や掌で子供の尻を叩いて「教育」するという伝統がつい最近までの西欧文化の根幹に深く根差しており、その幼児体験が後に尻叩きに興奮するという性愛慣習を生んでいることがよくわかる。尻叩きは、その痛みと屈辱感により、明らかにバイアグラのような性欲の亢進剤となっていたのだ。サドの小説でヒーローが自らを鞭打たせてから交合に及ぶという場面が頻出するのはそのためだったのである。大好事家ロミの協力者ジャン・フェクサスだけあって貴重な図版満載のおもしろい本となっている。

『私の読書日記』は、鹿島茂、立花隆、池澤夏樹、山崎努、酒井順子の五氏が毎週交代で執筆いたします。